令和五年（二〇二三）三月二十五日発行
『大倉山論集』　第六十九輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

近代日本孤児院事業の軌跡と展開

峯岸英雄

近代日本孤児院事業の軌跡と展開

峯岸英雄

目次

はじめに
一　社会背景としての明治時代の「家庭」と「家族」
二　上毛孤児院
三　岡山孤児院
四　孤児院事業のその後、と課題
おわりに

はじめに

本日は「近代日本孤児院事業の軌跡と展開」というタイトルで、明治時代におけるキリスト教関係者による孤児院事業から慈善活動、社会活動について皆さんと考えて参りたいと思います。

尚、私の講演は、孤児院事業の本質を追究する、福祉研究ではなく、近代日本のキリスト教史からの歴史事象としての考察であることを、予めお断り申し上げます。

「孤児」という言葉は現代社会においても格差や貧困、児童虐待問題ともリンクする、疎遠で乖離したカテゴリーではありません。昭和二十二年（一九四七）、空襲に遭った戦災孤児と復員兵の共同生活を描いたラジオドラマ「鐘の鳴る丘」が放送され、昭和二十三年（一九四八）、クリスチャンの澤田美喜が在日米軍将兵と日本人女性との孤児を救済した、エリザベスサンダースホームが大磯に開園します。昭和二十七年（一九五二）には、孤児院からの養子である、少女アン・シャーリーの物語であるモンゴメリーの『赤毛のアン』（三笠書房）が村岡花子によって翻訳され、ベストセラーとなります。

『赤毛のアン』の人気の背景には、太平洋戦争によって両親や親族との「絆」から切り離された戦災孤児のイメージが戦後から数年の国民の心に残存していたこと、戦後の新しい価値観の中で未来を切り拓く子供たちへの期待と希望がありました。今一つ付け加えれば、昭和四十三年（一九六八）には梶原一騎原作の漫画「タイガーマスク」が少年誌に連載されます。主人公の伊達直人は孤児院「チビッコハウス」の出身として描かれました。戦後二十年程のスパンでは「孤児」は密接なものでした。

一　社会背景としての明治時代の「家庭」と「家族」

急激な近代化による弊害から経済的な格差問題が生まれた明治時代において、社会福祉、社会事業の概念は極めて曖昧でした。殖産興業による産業形態の変革、日清・日露戦争に直面したように国際社会への参入、現代も続く東京一極集中などから生まれた貧困社会や貧民街は大きな社会問題となります。熾烈で過酷な労働事情や労働環境の実態を背景とした、当時の下層社会のルポルタージュとして、明治二十六年（一八九三）、桜田文吾（筆名・大我居士）『貧天地饑寒窟探検記』（日本新聞社）。同年、松原岩五郎（筆名・乾坤一布衣）『最暗黒の東京』（民友社）。明治三十二年（一八九九）、横山源之助『日本之下層社会』（教文館）が刊行されました。明治政府は、明治七年（一八七四）から大正末期まで、慈恵的な救貧制度として今日の生活保護制度に近い「恤救規則」を施行しますが、実効性に乏しいものでした。

次に、明治の「家庭」、「家族」の認識変化を考えてみましょう。明治時代、旧来の家督制度や家長風土を見直すように、「家庭」や「家族」概念と意識改革を旗頭とした雑誌媒体が登場します。

一つ目は、明治女学校を創設したキリスト教教育家・巌本善治が、明治期の女性地位向上と幸福増進を標榜する『女学雑誌』を創刊し、「和楽団欒」を象徴するイギリスの「ホーム」を提唱しました。二つ目は、徳富蘇峰が主宰した言論団体・民友社が中産階級を対象として、婦人啓蒙と家庭教養を主眼とした、後年の婦人雑誌の先駆け的な『家庭雑誌』が創刊されます。因みに、蘇峰も巌本善治同様に、「ホーム」理論を民友社の雑誌『国民之友』などで紹介しています。三番目が社会主義者・堺利彦によって、労働者階層を対象に社会主義的立場からの理想的な家庭構築を

主唱した、民友社と同じタイトルの『家庭雑誌』が、創刊されます。主義や立場の違いはあるものの、いずれも封建主義家庭像から脱却を試みた革新的な家庭構築を目指したものでした。

しかしながら、現実の庶民生活では、様々な要因から安楽、安寧な家庭が崩壊、瓦解し、経済的貧困児に加えて自然災害などによる孤児が増加します。残酷な表現ながら、「棄児」に近い概念かもしれません。

こうした社会的問題に、幾多のクリスチャンが神の導きによる救済の道を歩みます。本日は、近代日本孤児院事業の中から、「東の上毛孤児院、西の岡山孤児院」と称された、二つの代表的なキリスト教主義の孤児院の事業内容と展開から、近代日本における家庭や家族の問題、子供観について考えていきます。

二　上毛孤児院

最初に上毛孤児院から考えます。新島襄が安中藩藩士の子供だったことから、群馬県安中を軸とした上毛地域のキリスト教は同志社の信仰基地でした。最大の活動項目は、新島襄の薫陶を受けた、「有田屋」という味噌醤油醸造業者の湯浅次郎らキリスト教実業家を中心とした廃娼運動でした。そうした矯風活動の延長から、上毛地域の孤児救済活動の芽が育ちます。

上毛孤児院の物語は、宮内文作という前橋に住む一人の旅館経営者から始まります。宮内は養蚕業、饅頭屋を経て、前橋の桑町片原で「住吉屋」という旅館を営んでいましたが、ある時周辺で起きた火事の火元という濡れ衣を着せられ裁判沙汰から、告訴相手を刺殺しようとしたところ、笛木角太郎という伝道師から「神」、「罪」、「救」を説く『基督教三綱領』を読まされ、「復讐するは我にあり、我これを報いん」（愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任

せなさい）という福音を受け、笛木の導きで上毛地域のキリスト教の代表者である海老名弾正から受洗します。

今日は、この海老名弾正の名前がたびたび出てきます。海老名は明治初期に開校した熊本洋学校の出身者を中心に組織され、同学校が閉校後、新島襄を頼って京都同志社に吸収された、代表的な福音伝道集団である「熊本バンド」の一員です。先ほど触れた徳富蘇峰も熊本バンドのメンバーで、海老名と共に新島襄の弟子となり、新島の死後は、海老名が教義理念における新島理論の実践者となり、一方の蘇峰が論壇で新島理論を広めていくこととなります。

さて、宮内は住吉屋の宿泊客から、明治二十四年（一八九一）十月、安政地震の再来と称された、岐阜や愛知を襲った、マグニチュード八・〇，死者約七二〇〇人という濃尾地震によって生じた多数の震災孤児の惨状を聞き、自身と同じ前橋教会員で質屋業の横地源七郎と札幌で伝道活動経験者の金子尚雄の協力を得て、明治二十五年（一八九二）六月「基督教を基礎として無告（あわれ）の孤児（みなしご）を救い育てることを目的とする」、「将来孤児が独立して自活せるように日用必須の学問（がくもん、しごと）を教える」を設立項目として「上毛孤児院」を創設します。濃尾地震は近代日本の孤児院事業の原点となります。後半、触れます岡山孤児院もまた、濃尾地震の多くの震災孤児を救済します。

宮内の協力者の金子尚雄についてお話します。上毛孤児院の実質的運営者である金子は、明治の初期に埼玉に生まれ、漢学塾で勉強後、軍隊での怪我による入院中に同室の友人から借りて読んだ聖書に感動し、除隊後に数寄屋橋教会の田村直臣から受洗します。その後、北海道に渡ると、夏目漱石が赴任する以前の松山中学で英語教師でもあった、宣教師のウィリアム・ノイスの秘書として伝道活動に従事しました。ノイスが前橋の共愛学園に移る際に同行します。金子は京都の同志社で、本格的に神学を修めようと考えていたのですが、前橋での宮内との運命的な出会いから、孤児院事業の必要性と協力を懇願され、上毛孤児院の運営に携わることになります。

ここで、寄り道です。上毛孤児院創設の翌年、明治二十六年（一八九三）に、立身出世の夢が破れて、流浪の生活をおくっていた、五十嵐健治という青年が住吉屋で働いていました。讃美歌斉唱や聖書を読む姿など、主人の宮内夫婦の敬虔なキリスト教信仰生活を眼にします。五十嵐は程なく、住吉屋を辞めて、紆余曲折を経て、これも運命なのでしょうか、旅商人伝道師・中島佐一郎の導きで、クリスチャンとなります。やがて、一念発起して上京すると三越百貨店の宮中係などを経て、洗濯業界に身を投じて、起業します。その会社が、クリーニングの「白洋舎」です。クリスチャン作家の三浦綾子は、「心の汚れを洗い、清める」篤き信仰人生を歩んだ五十嵐の生涯を『夕あり朝あり』（一九八七・昭和六十二年、新潮社）という小説で描いています。住吉屋での宮内と五十嵐の関係性の象徴的な場面を要約して紹介します。主人の宮内は奉公人の五十嵐を「お前」などと呼び捨てにせず、「健治君」と呼びました。宮内が主人と奉公人の食事内容を差別せず、同じにしていたこと、や宮内夫婦が毎度、食事前に「貧しい人たちにも食事が与えられますように」、「親のいない子をお守りください」と祈る様子に五十嵐は驚きます。宮内と五十嵐が出かけた際、当時十五歳くらいで、未だ立身出世が諦めず、金銭欲が旺盛だった、五十嵐に宮内が「健治君。君は金儲けが人生の目的だ、と周囲に言っているそうだが、本当かね」と尋ねると「はい。お金で親孝行をしたいのです」と五十嵐が答えると、宮内は大きな溜息をついて「わしもそうじゃったが、金は人生を狂わせるぞ。親孝行とはそういうものではないぞ」と、説きました。三浦綾子は五十嵐への取材をもとに小説を書いていますので、多少の誇張はあれども、篤き信仰心をもつ宮内の姿を描いています。因みに五十嵐は白洋舎を経営する傍ら、クリスチャンの立場から家庭内安全運動など幾多の社会貢献を為しています。

上毛孤児院では、旧来の救貧と慈善事業から防貧と社会事業への転換をはかるため「基督教に基づく家族制」を運営の柱とし、院児に家庭や家族を認識させるために「模擬家族」を創出しました。主な実践項目は一家団欒を模した

食事空間と栄養を考慮した食事と、伝染予防や健康診断による衛生観念を認知させました。

次に、院児に労働の役割分担による「家族」概念を認識させるために「労働教育」を行いました。具体的な実践項目として、男児は院内に設置された園芸部内で自給を目的に野菜など農作物を栽培、収穫し、女児は炊事、洗濯を担当しました。教育面では尋常小学校レベルの勉強とキリスト教信仰としての礼拝による社会的道徳規範の修得を目指しました。

更に、宮内の死後、上毛孤児院では職業教育としての農場実習を目的に、明治四十四年（一九一一）、酷寒の北海道陸別で農場開拓に着手します。準備期間を経て、大正四年（一九一五）から上毛孤児院の主任・林勝造らと院児たちが地元の農家の協力を得て農業に従事します。この農場実習は、金子尚雄が北海道での伝道生活体験があったこと、陸別開墾事業として、トルストイ主義者の徳冨蘆花の半農生活に共鳴し、貧窮に喘ぐ人々に医療救済を施した医師の関寛斎が、先例として陸別で開墾事業を為していた事などが要因だった、と思われます。こうした農業実践を通した教育は岡山孤児院でも行われます。

宮内の遺志を受け継ぐのが、前橋の養蚕製糸業者、群馬県議員の森川抱次でした。森川は救世軍信徒で、群馬県内で廃娼運動に尽力し「上毛青年聯合会」を有志らと発足して、盟友雑誌『上毛之青年』を発行し、廃娼令に躊躇する群馬県に抗議しました。この森川が上毛孤児院の後身である現在の福祉事業施設、上毛愛隣社の基礎を築きます。森川の懸案は宮内が明治三十六年（一九〇三）に創設した、もう一つの社会事業である「上毛慈恵会養老院」をどのように継承していくか、でした。群馬県議会議員で多忙な森川は同じ救世軍信徒で、饅頭屋「平和堂」を営む田辺熊蔵を説得して養老院事業を託します。森川の自伝『敢闘七十五年』（一九四三・昭和十八年、紫波館）には、森川が田辺を説得する場面が描かれています。田辺は度重なる森川の説得で、家業の饅頭屋を廃業して、養老院事業に専念す

ることになります。こうしたキリスト教事業家らによる教義理念の具現化と実践が上毛地区の社会事業の原動力となったのです。

三　岡山孤児院

ここから、岡山孤児院と創設者の石井十次の話となります。宮崎県出身の石井は岡山県甲種医学校在籍中に聖書に触れ、先程触れた海老名弾正と同じ熊本バンドの金森通倫から受洗します。その後、偶然、三人の孤児の世話をしたことから孤児救済に携わることとなります。そして、イギリスで孤児救済活動を展開し、新島襄の招きで来日し、各地で啓蒙講演をしていたジョージ・ミューラーからの影響と、救貧対策としての職業技術修得を主眼としたペスタロッチの教育論、児童の自由性や個性を尊重するルソーの「エミール」理論をもとに、明治二十年（一八八七）、岡山孤児院の前身、児童保護組織「孤児教育会」を設立し、先程触れた濃尾地震の震災孤児を受け入れます。また、明治三十八年（一九〇五）の東北凶作の孤児も多数、受け入れるなど、収容人数が徐々に増加していきます。

岡山孤児院での児童保護の方針は、退院後、社会人として自立する為の職業教育で、男児には理容、活版印刷、大工仕事、鍛冶作業を、女児には裁縫、機織りを軸とした家事補助作業を教授しました。もう一つの特徴は上毛孤児院と同じように農業教育を軸とした人間形成をはかったことで、明治二十七年（一八九四）、石井の故郷である宮崎県への想いと傾倒していた二宮尊徳の「鋤鎌主義」の実践の為に、運営の収入源確保として養蚕・製糸用の桑園栽培を基礎に、孤児院を宮崎県児湯郡茶臼原に徐々に移設します。因みに「白樺派」の作家・武者小路実篤が、大正七年（一九一八）、農業実践を通して、個性や天命の尊重を重視することを提唱した「新しき村」が同じ児湯郡から始まった

のは、先例としての石井からの影響がありました。

ここで、石井の支援者について触れます。精神的支柱となるのが、先程触れた徳富蘇峰です。蘇峰は明治、大正、昭和の三代に亘るジャーナリストで、民友社を率いて近代日本の言論界を牽引しました。蘇峰は明治十九年（一八八六）、欧米の政治経済理論に基づいた、理想国家像を提示した『将来之日本』（経済雑誌社）を著して、それまでの一部の自由民権論者のような壮士的論陣ではなく、合理的で科学的な「言論」による主張で当時の青年層に多大な影響を与えました。石井が抱く農業体験を基礎とする自立自助論に裏付けされた自己の理想国家像と、蘇峰が唱えた田舎紳士論と称した、地方豪農層による農村からの資本主義構想に立脚した平民主義が共鳴して、石井は「蘇峰チルドレン」となります。そして、蘇峰と出会った石井は蘇峰の持つ政財界の豊富な人脈を得ます。このことは、石井にとって孤児院存続の命脈として、また寄付金の財源も含めた恩恵でした。

石井の最大の支援者が、現在のクラレや中国銀行、大原美術館の創設者である大原孫三郎です。大原は、同志社出身で倉敷の林薬局の主人、林源十郎の紹介で石井と出会います。林の会社は別名・林源十郎商店で、現在は岡山に本社を構える医療品販売のエバルスという会社に発展しています。大原は無私の献身ともいえる石井の孤児院事業に深く感銘し、豊富な財力で石井を積極的に援助します。大原については後程、あらためて触れます。

女性宣教師のアリス・ペティ・アダムスも石井の支援者です。アダムスは岡山孤児院に程近いところに、貧困に伴う疾病の治療と予防のための施療事業として花畑施療所を開設して、日本最古のセツルメント「岡山博愛会」を設立します。アダムスの遺志は現在、「岡山博愛会病院」として引き継がれています。アダムスは、社会事業家の安部磯雄が校長を務めていた、同志社系統の薇陽学院で教壇に立ちました。因みに、薇陽学院では石井が倫理課目として聖書を講義していました。アダムスは交流の深い、石井の孤児院事業を陰ながら支援し、アメリカのキリスト教関係者

に、事業内容を紹介していました。

この薇陽学院に在籍していたのが作家の正宗白鳥です。白鳥は『内村鑑三』（一九四九・昭和二十四年、細川書店）という自己のキリスト教体験記の中で、当時の様子を次のように振り返っています。原文のままですと、関係性がわかりにくいので、整理して紹介します。まず、白鳥は三宅雪嶺や志賀重昂らの国粋主義的な論調が肌に合わず、蘇峰の民友社の書籍や雑誌が如何に自分に有益であったか、を述べていて、自分も石井のような蘇峰チルドレンであったことを告白したあと、漢学中心の学校に不満を感じて薇陽学院に入学した、と記し「在学中、孤児院の院長、石井十次から聖書の講義を聴くことにした。これは、私にとって記念的事件である。石井はその当時、私同様、徳富蘇峰礼賛者であったが、蘇峰が帰郷の途中、岡山に寄って、岡山孤児院を参観するという、噂が伝わっていたので、石井はそれを待ち受けていた。その時、石井は足に腫物が出きて、歩行に困っていたが、『徳富さんが来なすったら、停車場まで出迎えに飛んでいきます』と言った」、と記しています。白鳥を通して、石井の蘇峰への傾倒振りが証明された格好です。

さて、岡山孤児院では、自立心と自尊心を育み、社会人としての精神を培うことを目的に、トーマス・バーナードが提唱した家族教育主義である「バーナード・ホーム」構想を規範とした「コッテージ（小舎）システム」を取り入れます。これは、保母一人に対して十人程度の児童が小舎内で、職業教育を受けるものです。岡山孤児院では「ライオン館」という名のコッテージが三館、建設されました。費用は現在の家庭用品や薬品販売の会社「ライオン」の原点で、当時、ライオン歯磨を代表商品とする小林富次郎商店からの寄付金によるものでした。創業者の小林富次郎は、海老名弾正門下生で、同志社出身の長田時行から洗礼を受けたキリスト教実業家でした。小林は海外の新聞で知った、現在のベルマークに似た慈善券で集金したものに、自己の寄付金を併せて、石井の事業に貢献しました。現在のライ

オンの社是は「愛の精神の実践」です。小林のキリスト教精神を継承した社是と言えるでしょう。

明治の児童保護事業には一般社会の認知と理解が不可欠でした。中でも、音楽隊は、孤児院共通の啓蒙ツールでした。やがて、音楽隊の演奏に孤児院の様子を伝える写真を幻燈で映写する仕法が加わります。松村介石から洗礼を受けた五十嵐喜廣によって、明治二十八年（一八九五）に開設された岐阜の濃飛育児院では、院児への情操教育として、音楽教育が行われ、寄付金募集活動の為に「音楽幻燈隊」が結成されました。この濃飛育児院の活動が音楽幻燈隊の嚆矢のようで、岡山孤児院では明治三十一年（一八九八）頃から、上毛孤児院が明治三十五年（一九〇二）頃から音楽幻燈隊が活動しています。具体的には、演奏と幻燈映写の前後に関係者が登壇し、寄付金募集を呼び掛けるものでした。こうした、音楽隊方式は、イギリス発祥のキリスト教慈善団体の救世軍の活動が日本の関係者や関係機関に伝わってきたものと推定されます。上毛孤児院では、大正期に、音楽幻燈に活動写真をミックスさせた募金公演も行われました。岡山孤児院の音楽幻燈隊の音楽部門の背景には、先程触れた、石井の支援者である小林富次郎商店が、ライオン歯磨の商品宣伝として、明治三十年（一八九七）頃から幟を立て、試供品を配布する音楽隊を組織して、全国各地を回っていたことも要因の一つとしてあるかもしれません。岡山孤児院では、国内だけでなく海外でも寄付金募集の音楽幻燈隊が活動しました。

先に紹介した大原孫三郎は、林源十郎から石井を紹介され、倉敷で、初めて岡山孤児院主催の音楽幻燈隊を鑑賞した際、幻燈機に映りだされた、ボロ服を纏い、孤児たちと接している石井の姿に感動して、所持していた財布ごと募金箱に投入した、という逸話が残っています。また、東京での慈善音楽祭と称する岡山孤児院の募金公演では、来場していた徳富蘇峰が感激のあまり、登壇して「石井君の労を感謝する為に一同起立され、感謝の意を表しようではないか」と観衆に呼びかけ、会場が拍手の海と化した、との逸話も残っています。

石井はそれだけ、カリスマ性を秘めた存在でしたが、このことが禍根を残すことになりますが、それは後程、触れましょう。

孤児院活動を普及させるツールが機関誌と印刷物です。上毛孤児院では、明治三十二年（一八九九）に『孤児之友』を創刊します。明治三十六年（一九〇三）、『孤児之友』は五十号発刊を機に誌名を『上毛孤児院月報』に改題していますが、名称の由来は、同志社出身で新島襄の薫陶を受けた、安中教会牧師・柏木義円の主宰誌『上毛教界月報』に倣ったものでした。『上毛教界月報』は、非戦論主義的立場で、上毛地区だけでなく、全国のキリスト教関係者だけでなく、知識人や文化人など広範囲の読者を擁していたコミュニティ・マガジンでした。岡山孤児院では、院内の活版印刷部を稼働して、機関誌『岡山孤児院新報』を刊行しました。

四　孤児院事業のその後、と課題

ここで、孤児院事業の、その後について考えてみます。上毛孤児院は、宮内、横地、金子による集団合議制で運営され、森川、田辺と受け継がれていきます。岡山孤児院はどうでしょう。「巨星墜つ」という言葉があります。石井は大正三年（一九一四）、四十八歳で天に召されます。岡山孤児院創設が明治二十年（一八八七）ですから、石井の活動は実質三十年余りでした。石井の死後は支援者の大原が事業継続に尽力しますが、一旦は身を引き、岡山孤児院出身者で、横浜の輸出絹物会社を経営していた大庭猛に託します。しかし、大庭の会社が倒産したことも重なり、大正十五年（一九二六）、大原の決断で岡山孤児院は事実上、解散します。石井の遺志は昭和二十年（一九四五）、宮崎県の「石井記念友愛社」として受け継がれ、地域に根差した教育や福祉の活動を展開しています。因みに現在の友愛

社の理事長は石井の曾孫、児島草次郎さんです。

中国の日本福祉研究者の姜克實は、『近代日本の社会事業思想―国家の「公益」と宗教の「愛」』（二〇一一・平成二十三年、ミネルヴァ書房）の中で石井の活動について「自らの宗教思想や霊感を至上の価値としたため、施設経営の財政的持続性を考慮せず、その社会的効果にも無頓着だった。そのため、最終的には私的ユートピアの構想に没入し、社会性を失った」と記しています。「霊感」というのは信仰心に根差した「直観」とも言うべきものでしょう。かつて、徳富蘇峰は石井を「直情径行の快男児」と評しました。石井の孤児救済は社会的認知が高まるにつれ、信仰による熱望と妄想が混濁状態に陥り、愛隣の想いが強すぎて許容範囲を超え、集団養護の限界を迎えてしまいます。

篤き信仰心だけでは孤児院を運営できません。クリスチャンの本郷定次郎は東京の京橋での孤児院「貧児教育暁星園」を一旦、閉鎖して、栃木県の黒磯市那須に「那須孤児院暁星園」を開設します。この孤児院をクリスチャンで、本郷の友人で、新宿中村屋創業者の相馬愛蔵が訪れました。この時の様子を相馬は『一商人として』（一九三八・昭和十三年、岩波書店）の中で、触れています。一部、改変して紹介します。「那須孤児院の仕事は世間でも知られていたので、孤児たちは本郷の庇護のもとに不自由なく暮らしていると思いのほか、食べたい盛りの子供たちに薄い粥がわずか、という窮状で、こどもたちが本郷夫妻にすがって、「も少し頂戴よ」、「頂戴よ」と哀願するに、本郷はそれを与えることができない。そんな目の前の様子に自分は我慢できなくなり、孤児院をとびだして本郷を援助するために募金集めに奔走した」。これが当時の多くの孤児院の実状であった、かもしれません。

終わりの頃の岡山孤児院は、寄付金と借金の追いかけっこ、のような状況でした。数々の企業を運営していた大原は細かい予算だてをしない、キャッシュフローを失念したような石井の運営姿勢を不安に思っていたようです。石井には柿原誠一郎、小野田徹弥という優秀なブレーンがいたのですが、石井のカリスマ性が強すぎました。寄付金募集

の音楽隊もハワイやサンフランシスコ、韓国まで遠征していたので、経費が寄付金を上回っていた可能性があり、火の車、自転車操業状態だったでしょう。石井の死後には多額の借金が発覚し、大原が金庫番の柿原に「石井君の名誉のため利子を値切らず、全額返済せよ」と、紙幣の詰まった鞄を差し出した、と言われています。

それでも、大原は石井の死後、石井の夢を実現しました。石井の理想として、農業従事を軸とした人間教育を目指して、院児たちを農業殖民とし、地域コミュニティ建設を計画していました。先程、触れた姜克實の指摘にもあるユートピア構想でした。それが、石井の死から一年後の大正四年（一九一五）に開校した茶臼原農場学校です。校長には、ブラジル移民経験者で、東京帝国大学農学科卒業生で、クリスチャンの松本圭一を迎えました。このことから、茶臼原農場学校は単一的な国内での農業コミュニティにとどまらない、北米や南米などへの移民策も見据えた壮大な計画が垣間見えます。

おわりに

最後に、児童、子供ということをあらためて考えてみます。現在、児童は児童福祉法においては「全ての児童は生活を保障され、愛され、保護されること、その心身は穏やかな成長及び発達並びに、その目的が図られる権利を有する」。児童憲章では「児童は人として尊ばれる。児童は社会の一員として重んぜられる」と定義されています。

子供は無垢で、可憐で、愛情を注ぐべき存在、という概念はいつから起きたのでしょう。フランスの歴史学者、アリエスは『〈子供〉の誕生』（一九八〇・昭和五十五年、みすず書房、杉山光信・杉山恵美子訳）で、中世ヨーロッパまでは、子供は労働力の一つとされ、大人と子供の境界線が曖昧だった、と指摘しています。河原和枝は『子ども観

の近代―『赤い鳥』と「童心」の理想』（一九九八・平成十年、中央公論新社）で、日本社会で、子供を可憐で無垢な存在と捉えるロマン主義的な概念は、大正中期の鈴木三重吉の児童雑誌『赤い鳥』を中心とする童話や童謡の隆盛期に確立した、と指摘しています。

こうした研究成果には賛否両論あるかもしれませんが、今日、取り上げたキリスト者とその支援者による貧児や孤児への救済活動は時代を超越した人間愛の行為かもしれません。

（編者付記）本稿は、令和四年（二〇二二）三月十九日の大倉山講演会における「近代日本孤児事業の軌跡と展開」（横浜市大倉山記念館ホール）と題する講演内容に、加筆修正を加えて成稿したものである。